

書評

稲葉三千男

『現代マスコミ論』

(青木書店)

佐藤 毅

『現代コミュニケーション論』

(青木書店)

滝沢正樹

『コミュニケーションの社会理論』

(新評論)

林 進

(埼玉大学)

上記の三冊の本はいずれも、一九七六年に刊行されたものであり、著者のそれまでの発表論文を中心にまとめられたも

のである。私に課された仕事は、それぞ
れの本の内容についての批評というよ
り、三冊の本が同時期にあい次いで刊行
されたことの意味を考えること、ないし
はそれについての感想を述べることであ
る。

私はこの三人の著者と、ほぼ同時期に
マスコミ研究者となった。一九五四年か
ら刊行された『マス・コミュニケーション
講座』(河出書房)や、五八年の『思
想』の「特集 マス・メディアとしての
テレビジョン」や、六〇——六一年の
『講座 現代マス・コミュニケーション
』(河出書房新社)で三人の著者と私
はともに編集協力者であったり、執筆者
であったりした。私たちは若くしてマス
コミ研究者として出発したが、日本のマ
スコミ研究じたいが当時は若かった。そ
れから二十数年、著者たちがそれぞれに
蓄積された研究成果を立派な本にまとめ
られたことは、個人的にわたるが、同世
代の研究者の一人として、私は心から敬
意を覚え、喜びを感じる。

同世代の研究者といったが、世代はデ

イルタイがいったように、感受性の鋭い
時期に共通の歴史的体験に影響された人
びとのことである。研究者としての世代
も、研究者としての形成期に共通の歴史
的状况に影響された人びととして考える
ことができる。私たちの世代の研究者に
とっての共通の歴史的状况とは、一九五
〇年代前半における戦後日本の体制的再
編、逆コースの政治状況であり、五一年
の民放発足、五三年のテレビ放送開始に
象徴される日本のマスコミの本格的発展
の状況だった。マス・メディアが世論を
操作し、民衆を政治的無関心に陥らせ、
社会の変革を阻んでいるという状況認識
が、多くの人たちに共有されていた。し
たがって、私たちの世代のマスコミ研究
者にとって、マスコミは現代社会解明の
キー・プロブレムであり、また、マスコ
ミ研究は現代社会認識の中心的位置を占
めるものとして考えられていた。これは
五〇年代後半に入って、大衆社会論とい
うもっと明確な形をとるようになった
が、当時はすくなくとも、私たちの前に
マス・コミュニケーションという新し

い、重大な、そして関心を引きつける問題があり、それを研究対象に選ぶことは、程度のちがいはあっても、私たちにとって自然なことのように感じられていたように思う。大げさにいえば、それは私たちにとって運命的な出会いだった。稲葉氏は、彼の「マスコミ研究私史」の中で、「わたしがマス・コミュニケーションの研究者ということになったのは、まったくの偶然である」と書いているが、それはいわば運命的偶然だったと理解すべきなのではなからうか。

同世代である三人の著者の「作品」に、その世代的特質が共通に反映している特徴がある。それは、マルクス主義的な歴史的、全体社会関連的な研究視角の採用である。もちろん、著者によってその濃淡、その強弱の程度のちがいがあろう。積極的に「マスコミ研究にマルクス主義を適用しよう」と試みてきた稲葉氏、マルクス主義の疎外論や階級論を理論的に援用する佐藤氏、社会心理学を全体社会の歴史的文脈に結びつけようとしてマルクス主義を導入する滝沢氏と、そ

れぞれに異なる立場とアプローチでマルクス主義にかかわっている。

五〇年代前半の日本の社会科学にとつて、その立場をとるかとは別として、マルクス主義は共通の座標軸だったといえる。これはきわめて日本的な特殊性であつて、そのために、日本における大衆社会論争も、欧米とちがって、マルクス主義社会理論の現代的補正ないし修正として登場するということになったのである。そのような状況の下で、私たちの世代のマスコミ研究者は、全体として、マルクス主義であつてもなくても、多少とも歴史的、全体社会関連的な研究視角を共有していた。すくなくとも、そのような全体的視座との関連において、自分の研究を位置づけようとしていた。これは、行動科学的なアメリカのマスコミ研究にたいする、当時の日本のマスコミ研究の独自性だった。それはまた、アメリカのマスコミ研究が政策科学的性格をもっていたのにたいし、日本のマスコミ研究に、全体として、体制批判的性格をもたせることにもなっていた。三人の

著者はいずれも、このようなマスコミ研究の世代的特質を、その後も強くもちつづけている。

三人に共通しているもう一つの特徴は、かならずしも世代的なものといえないが、マスコミ研究からより基本的なコミュニケーション研究への移行である。佐藤氏の書名が『現代コミュニケーション論』であり、その中でも著者の力点が置かれているのは「Ⅲ 異化論」であつて、コミュニケーションの異化作用をブレヒトから始まって、中井正一を中心にマルクス、フーコー、アメリカのマスコミ研究など、多方面にわたつて理論的に検討している。滝沢氏の書名も『コミュニケーションの社会理論』であつて、その中心はミードのコミュニケーション概念の詳細な検討と、それに欠けている階級対立によるデイス・コミュニケーションのマルクス主義的説明である。稲葉氏についても、『現代マスコミ論』の前年に刊行された彼の論文集『現代コミュニケーションの理論』を見ると、第一部のコミュニケーションの理論や、第三部の

コミュニケーションと社会の論文がより新しく、第二部のマス・コミュニケーションの理論の論文はより古い。彼は、「わたしの場合も、マスコミュニケーション研究は六〇年代後半から下り坂である」と卒直に述べ、コミュニケーションや情報などのより基本的な問題に関心が移っていることを示唆している。

マスコミ研究の停滞や不活発が問題となつてから久しいが、まだ、それを克服したマスコミ研究の全体的な発展があつたとはいえない。マスコミの現実の展開にともなつて、新しい研究課題がきつぎと現われ、研究が展開されてきたが、マスコミ研究を主導する、新しいグラント・セオリーが形成されていない。著者たちは、マスコミ研究からコミュニケーション研究に、現象論から本質論に沈潜することによって、新しい、生産的な理論を構築しようとしているのだろうか。たしかに、マスコミ研究者の理論的営為が志向しなければならぬ主要目標の一つとして、マスコミ論を包括する社会的コミュニケーションの総過程論がある。

マスコミ過程は他のコミュニケーション過程と分離されないで、社会的コミュニケーションの全体的システムの中に位置づけられねばならない。著者たちはそれぞれのコミュニケーション論の中で、社会的コミュニケーションの総過程論を構築するのに欠かせない、コミュニケーション論の基本的視座を探求している。

それは、コミュニケーションにおける異化、疎外、矛盾という弁証法的関係を通しての人間と社会への根本的な考察である。佐藤氏は、マス・メディアによつて同化へと操作されている大衆が、いかにして主体的な異化によつて自立し、「組織化」する大衆に変わりうるかを論じている。滝沢氏は、Iとmeの統合という自我過程のコミュニケーションを通して、自立的で合理的な個人の成立を探り、「疎外された労働」の止揚による人間の普遍的交通と世界的協働への可能性を展望している。稲葉氏は、「矛盾の運動」としてコミュニケーションを把握し、我有化^{II}他有化の構造を軸に、資本主義的な階級矛盾の克服による「真の民

主義社会建設の理想」実現の原理と方法を追求している。いづれも、否定的契機を媒介とするコミュニケーション、人間、社会の弁証法的な変革と発展を、明確に志向している。

このような著者たちのコミュニケーション論の基本的視座は、コミュニケーション哲学といつてもよい性格がある。新しい社会的コミュニケーションのトータルな理論の構築には、自覚的なコミュニケーションの哲学、コミュニケーションの本質的把握が前提とならなければならぬ。いいかえれば、コミュニケーションの哲学とコミュニケーションの社会的現実の分析を媒介するものとして、コミュニケーションのトータルな理論が要請されているといえるだろう。媒介的理論が確立されていないところでのマスコミ現象の批判は、イデオロギー的か断片的なものにならざるをえないし、マスコミの具体的な現実にたいする個別的研究は、理論の媒介がなければ、相互の位置づけ、統合ができない。媒介的な理論は、トータルな社会的コミュニケーション

ション理論であるだけでなく、さらにそれとマスコミの個別的な社会的現実の研究とを媒介する中間的な理論でもある。アクチュアルな中間的理論がマスコミの個別研究を方向づけ、個別問題の布置構造を明らかにする。三人の著者は、マスコミ研究を生産的にし、現実にたいし有効なものにするコミュニケーションの諸理論が、立脚しなければならぬ基盤についての、共通の明確な主張を提示しているのである。

『新聞学評論』第26号で岡田直之氏が、トータルな社会理論の枠組みを欠いた実証主義的マスコミ研究の批判的検討と、それにとって代わられた大衆社会論的マスコミ研究の再評価の必要を論じたが、たしかに、今日のはげしい変動過程にある社会的現実には、新しい、包括的なコミュニケーション理論構築の必要を迫っている。それとマスコミの個別研究を媒介する中間的理論も切実に求められている。現代社会の急速な情報化とそれに伴う社会変動は、かつて五〇年代前半に、マスコミ研究が現代社会認識の中

心的位置を占めるものと考えられたように、今日では、マスコミを包括する社会的コミュニケーションの総過程を、現代社会解明のキー・プロブレムとしているといえよう。

かつて私たちの世代の研究者は、かならずしもマルクス主義に限定されなかったが、歴史的、全体社会関連的な研究視角を共有していた。それは、今日のコミュニケーション理論の構築にも有効で、不可欠なものと考えられる。さらに、今日の社会的現実の危機的動態は、コミュニケーションと人間と社会のあり方に根本的反省をつきつけている現在、著者たちの明確な、基本的なコミュニケーション研究の視座に学ばなければならないところが多いと思われる。

さいごに、私の希望を付言すれば、著者たちのコミュニケーションにたいする基本的視座が、媒介的理論の展開を通して、今日の社会的現実とより密接に交流し、さらに弁証法的に発展することを、日本のマスコミ研究の新しい発展のためにも、期待したい。

伊藤正己編
『放送制度——その現状と展望——』1・2
(日本放送出版協会)

千葉雄次郎

戦後日本の電気通信と放送に関する基本法として電波法・放送法が制定されてから、はや四半世紀が経過した。その間に放送が社会・文化に与える影響はひろがり深まる一途であり、通信技術の進歩も一日として休むことなくつづいている。これほどに対象領域が拡大の一途をたどった研究分野も稀であるだろう。しかも通信放送は国家機構との関連を無視することのできない文化であり、その制度の検討は一方で現代の法哲学の基本にかかわり、他方できわめて実務的な運用につながっている。専門学者の研究会を母体に『放送制度——その現状と展望』二巻が公刊されたことは、ひさしい期待にこたえる事業と言わねばならない。